

H30 年度 短期海外研修プログラム
～国立清華大学訪問他～

報告書

(2018.9.17-9.21)

上越教育大学



目次

H30年度短期海外研修プログラム（台湾：国立清華大学）日程表	1
--------------------------------	---

参加者及び引率者名簿	2
------------	---

参加学生の報告書	3
----------	---

記録写真	28
------	----

H30年度短期海外研修プログラム（台湾：国立清華大学）日程表

研修期間：平成30年9月17日（月）～9月21日（金）

目的地：台湾：国立清華大学 及び 附属小学校，国立故宮博物院 他
（台湾：新竹市，台北市 他）

日 程

日	月 日	現地時間	出発地／到着地	宿泊地
1	9月17日（月）	12:30	<u>（現地集合）</u> <u>成田空港ロビー</u>	
		14:30 17:15	成田空港 発 台北桃園空港着	
			台北桃園空港発 新竹市 着	〔カールトンホテル 中華館泊〕
2	9月18日（火）	午前	福龍小学校見学	
		午後	美術館，博物館等 見学	〔カールトンホテル 中華館泊〕
3	9月19日（水）	午前	国立清華大学附属 小学校との交流	
		午後	国立清華大学の学 生との交流	〔カールトンホテル 中華館泊〕
4	9月20日（木）		新竹市 発 台北市 着 文化研修	〔國聯大飯店泊〕
5	9月21日（金）		台北市ホテル発 台北桃園空港着	
		12:40 17:00	台北桃園空港発 成田空港 着	
			<u>（現地解散）</u> <u>成田空港ロビー</u>	

Ｈ３０年度短期海外研修プログラム（台湾）参加者及び引率者名簿

No.	所属 1	所属 2	学年	性別	氏名
1	学部	学校心理コース	2	女	ヒグチ 樋口 りか
2	大学院	言語系教育実践コース (英語)	1	女	カミムラ 上村 カホ 果穂
3	大学院	言語系教育実践コース (英語)	1	女	サカグチ 坂口 カズヨ 和代
4	大学院	言語系教育実践コース (英語)	1	男	ソウクラ 宗倉 タスク 祐
5	大学院	言語系教育実践コース (英語)	2	男	クリタ 栗田 レオ 玲於
6	大学院	芸術系教育実践コース (美術)	2	女	オガサワラ 小笠原 マキ 蒔
7	大学院	芸術系教育実践コース (美術)	3	女	タナカ 田中 シホ 詩穂
8	引率者	芸術系教育実践コース (美術)		女	ドウヤ 洞谷 アリス 亜里佐
9	引率者	言語系教育実践コース (英語)		女	ホウジョウ 北條 レイコ 礼子

学生 7 名 引率者 2 名

参加報告書

台湾研修事後報告書

学校心理コース

292121K 学部2 樋口りか

参加するにあたり

みなさんもお存知の通り、2020年の次期学習指導要領改訂にあたり小学校3、4年生では英語が外国語活動として導入され、小学校5、6年生では英語の教科書化が実施されます。このことから、私は小学校教員を目指すうえで英語教育についてよく知っている必要があると考えています。また、他国で実施されている英語教育について学び、将来自分の授業に取り入れることによって、グローバル化が進んだ社会に出る子供たちに対して、よりよい英語教育をしたいと考えています。今回、台湾で実施されている英語教育とはどのようなものなのか、また日本の教育との相違について実際に現地で学びたいと思い参加を決意しました。

学校見学で印象に残っていることや考えたこと

私たちは今回の研修で、福龍小学校、国立清華大学附属小学校、国立清華大学の3校を見学させて頂きました。それぞれの学校で印象に残っていることや考えたことについて、日本の小学校との比較を交えながら述べようと思います。

まず初めに、福龍小学校についてです。福龍小学校に着いてまず驚いたのは、校長先生がわざわざ外まで出てきてくださり、私たちを歓迎してくださったことです。私の個人的なイメージかもしれませんが、日本の学校は校長先生が学校の外まで出てきてだれかを出迎えているイメージがありません。出迎えるのは、教頭先生などの役職が校長先生より下の先生方で、校長先生は教室で待っているイメージです。福龍小学校の校長先生は、最初から最後まで校内見学に私たちと一緒に回り、学校のことについて様々なことを教えてくださいました。

学校のことについて教えていただいた中で、一番印象に残っていることがあります。それは、学校においてあるものや、場所の一つ一つに校長先生の強い思いが込められているということです。具体例を二つ紹介しようと思います。一つ目は、廊下やグラウンド、階段です。これらがすべてカラフルに彩られており、これは明るい学校にという思いが込められているそうです。私自身も、カラフルに彩られた校舎を見て明るい学校という第一印象を持ちました。これに対して、日本の小学校は、白一色や木造、グラウンドは土のところが少なくないイメージで、どこかもの寂しい印象を受けます。カラフルに学校を彩ることによって、明るいという印象を与えるとともに、子どもたちの学校に来る意欲の増加につながると思いました。二つ目は、中庭です。中庭には、畑や、池、カラフルなベンチが取り付けられた、ハート型のカラフルなアーチのオブジェなどがありました。このハート型のオブジェは、七つのハート型の鉄骨で構成されています。その一つ一つが11本の鉄骨で繋がれ、下には12脚の椅子が備え付けられています。これは、先生は1年間、つまり12ヵ月間セブンイレブンのように24時間子供たちに関心を持ち続けましょうという意味が込められています。使用している棒の本数にまで意味が込められていることにとても驚いたと同時に、校長先生が本当に学校づくりに対して熱心に考え、直接取り組んでこられたのだと深い感銘を受けました。

次に、国立清華大学附属小学校についてです。附属小学校でも、校長先生がわざわざ私たちを出迎えてくださり、私たちに校内を案内してくださいました。附属小学校で特に印象に残っているのは、子どもたちの積極性と、日本の小学校よりも進んだ英語教育の実施です。私たちは美術の授業と小学5年生の英語の授業を見学させていただきましたが、どちらの授業でも、子どもたちが先生の発問に対して積極的に手をあげたり、黒板の前に出て発言したりしていました。これは、私がこれまでに実地研究の授業や、学校ボランティアの授業で見た小学生の授業態度とは少しかけ離れていました。先生が子どもたちに対して発問を投げかけても反応が薄かったり、手を挙げて発表してくださいと言われて、自分から発表する人はあまり多くありません。

英語の授業では、発音の仕方や発音記号、難易度の高い単語まで子どもたちが学んでい

るのを見て、台湾の小学校で実施されている英語教育のレベルの高さにとても驚きました。発音の仕方についていえば、台湾の小学生が習っている内容を、恥ずかしながら私は高校の授業で軽く、大学の授業で詳しく学びました。子どもたちは、英単語を書くこともできますし、難易度の高い単語の意味も分かっていました。どうして子どもたちにここまで英語力が身についているのか、校長先生に聞いたところ、一年生から英語の授業があり、学年によって、英語を学ぶカリキュラムがしっかりと作られていると教えてくださいました。東京都品川区では小学校一年生から英語教育を導入しているようですが、日本全体としてはこの報告書の最初にも書いた通り、2020年からやっと三年生から英語が外国語活動として導入されます。これに比べて、台湾では、2001年度より小学校5年生以上に対して英語の授業が必修科目として始まり、2005年には小学校3年生以上に対して英語の授業が必修科目として置かれています。ほかにも、同じ東アジアの中国や韓国に比べて日本は遅いスタートを切ることになります。これからの時代を生き抜いていかなければならない子どもたちを育成するためには、日本の英語教育をもう少し水準を他の国に近づける必要があると思いました。また、台湾の小学校は日本とは違い、それぞれの科目で先生が異なります。英語も、英語専門の先生なので英語力がやはり高いようです。これを知って、私も小学校教員になった際には出来るだけ質の高い英語を子供たちに聞かせてあげられるように、しっかりと英語力を身に着けたいと改めて思いました。

最後に、国立清華大学についてです。国立清華大学では、国立清華大学の学生さんとフリートークといった形で交流をさせていただきました。学生さんとは、清華大学に入った理由や、どんな授業を受けているかなど真面目な話から、台北のおすすめのお店、恋愛のことなどプライベートな話まで様々なことについて話しました。このとき、英語が話せるだけで違う国の人々とこうやって色んな話ができるというのは、とても素晴らしいことだと改めて思いましたし、異文化交流は楽しいと改めて思いました。ほかの国の人と話す、自分が当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったりします。そういった違いを知り受け入れることで、自分の考え方や見方が大きく広がるような気がします。違ってドキドキするし、ワクワクします。違いがあるって面白いです。

あとがき

私はこの台湾研修中に自分の将来について考えていました。今まで私はやりたいことが多すぎて、すべてが中途半端になってしまっている自分に嫌気がさしつつも、仕方ないとどこかで自分に言い聞かせて過ごしてきてしまいました。特に、やりたいことの一つである留学についていえば、ただ懂れているだけでなかなか行動できず、気づいたらもう大学生活も残り約半分です。帰国後、いろんな方に相談したりなどして、今はこの大学を卒業したら他大学の院に進学し留学したいと考えています。自分が思い描いているような教員になるためにこれから自分がどうしていくのか、また改めてしっかり考えていこうと思います。

最後に、この台湾研修でお世話になった先生方、大学院生の皆さん、また私たちを暖かく迎え入れてくださった台湾のみなさん、本当にありがとうございました。

台湾の小学校見学から学んだこと

言語系教育実践コース（英語）

305311P M1 上村 果穂

私は、2018 年 9 月 17 日から 21 日の 5 日間、台湾研修に参加した。山間部及び都市部の小学校を訪問したり、大学院生と交流したり、現地の食文化や観光名所も訪れ、五感で台湾を感じることができた。予想以上に充実した旅で、本当に楽しかった。一緒に本研修に参加した仲間との絆も深まり、かけがえのない思い出になったと言える。以下、特に印象に残っている小学校訪問について、2 日目に訪問した福龍小学校と 3 日目に訪問した国立清華大学附属小学校を挙げながら感じたことを書く。

1. 福龍国民小学校（9 月 18 日）

2 日目に、新竹郊外にある小規模小学校である福龍小学校を訪問した。全校人数はわずか 89 人との校長先生のお話に驚いた。1 日を通して、教育に情熱を注いでいた様子が印象的だった校長先生が説明してくださった。福龍小学校は、特色のある学校教育を推進する学校として台湾政府から指定されており、アートと自然を生かした教育に力を入れていた。例えば、校舎内は児童が自ら描いた絵が壁に描かれていたり、スクールカラーである虹色が陸上のトラックレーンや校内の柱、また、校庭のベンチを彩っていたり、校庭にある木の葉っぱ、枝、木の実など、元から存在している形あるものを使って、動物や人間に見立てた作品が多数展示されていた。これは、粘土や紙など、ある程度自分たちのテーマに合わせて変化できるものとは異なり、植物の自然の形を優先させ、自分たちのテーマに適応させるというスタイルであるため、より高度な技術や、想像力が働くのではないかと考えた。



もう1つ、自然を生かした教育として、給食の材料をできるだけ学校農園で採れた野菜を利用するという方針を取っていたのも印象的だった。学校農園では、台湾バナナを始めとして野菜を栽培しており、給食センターに取れた食材を運び、それを使ったメニューを調理しているそうだ。また、野菜畑の土にもこだわりがあり、無農薬栽培で土中の微生物を肥料・栄養変わりにして育てていた。児童の健康と安全に大変気を配張りながら、日本語で言う「食育」を行っており、説明してくださった校長先生の情熱に心を打たれた。お昼には、ランチルームで実際に給食をいただくことが出来た。(写真参照) 味付けは、素材の味が生かされたシンプルな薄味で、児童の健康が考えられたメニューであった。給食の文化は、日本にしかないと考えていたのでこの体験は大変興味深く、また食育の大切さを考えさせられるいい機会となった。



一方で、福龍小学校が直面している問題にも触れる機会があった。それは、日本と同様に少子化と地方過疎化が進んでいるということである。福龍小学校は、郊外に立地していることから、都市部に会社がある保護者にとって非常に通いにくいと言える。仕事を求めて都市部に移り住む人々が増加している関係で、福龍小学校の全校児童数は年々減少しており、校長先生は廃校の危機に直面しているそうだ。この問題に関しては、上越市ももちろん例外ではない。本研修に参加した同じコースに在籍している現職の先生は、彼女の小学校が同じような状況にあることから、校長先生と対応法などについて議論していた。わずかな時間であったが、台湾の社会問題が伺えた瞬間であった。

2. 国立清華大学附属小学校 (9月19日)

3日目には、清華大学附属小学校を見学させていただいた。福龍小学校とは異なり、新竹

の都市部に位置しており、全校人数も非常に多い印象を受けた。学校の設備や校舎に関しても、手が施されており、さすが附属！というような整備が成されていた。こちらの小学校も特徴的な教育を行っており、小学3年生より美術教育に特化したコースがある。ただ美術のスキルを上げることが目標ではなく、アートの才能に秘められた独創的なポテンシャルを勉強に発揮するというコンセプトで、特別コースが設けられている。週5日、毎日美術の授業があり、児童の自由な発想を大切にしながら、一人ひとりが作品を仕上げていた。見学した3年生のクラスでは、白い紙に吹き絵で描かれた黒い線が伸びており、その線が何に見えるか、思い思いのイメージで線を生かした絵を描くという授業であった。そこで強烈に印象に残っているのは、児童の堂々と自信に溢れた自己表現能力である。先生が何に見えるか児童に問いかけると、指名された児童はしっかり教壇に立って自分の意見を人前で話すことができていた。恥ずかしがることなく、まず挨拶をして、何に見えるのか自己表現をしていた。これは、日本の学校でよく見られる光景とは言いがたい。日本だったら、発表どころか人目に出ることを躊躇い、自分の意見を持っていない学生が多数いる。大学生になっても大多数はこのような場合が多い。そのため、私にとって、小学生が躊躇わずに自信を持って自己表現をしていることは非常に驚いたし、同時に、日本人として恥ずかしい限りであった。

英語の授業でも、同じように驚きと恥ずかしさを感じた。5年生の英語のクラスを見学させていただいたが、レベルの高さに衝撃を受けた（というより、日本の英語教育のレベルが低すぎると言ったほうが正確なのかもしれない）。その教室は、英語の学習専門の部屋で、音響、ICTなど設備が整っていた。先生の英語は非常に流暢で、アメリカ英語のような、日本人にとって聞き馴染みのある発音だった。本時では、thの発音には2つの違いがあり、有声音と無声音を学ぶというようなテーマだった。子ども向けのICT教材が研究されており、ネイティブスピーカーが単語を発音したり、有声音と無声音どちらが正しいか、発音を聞いて選ぶゲームを通してthの発音を児童に定着させる工夫がされていた。自分のことを振り返ると、前期の授業でthの発音を練習したことを思い出した。大学の授業で、発音練習を行っていたのだ。これは、とんでもない差である。台湾全ての小学校がこのレベルではないと思うが、この見学で、日本の英語教育の深刻さを改めて感じた。あまりにも遅れて

いて、恥ずかしさが込み上げてきた。悲しい事実であるが、3日目の見学で抱いた感情はネガティブなものだった。しかしながら、これで悲しんでいては仕方がないので、この経験から何ができるのか、しっかり考えて行動に移すことが極めて大切であると思う。

このように、2日間で、台湾の全く違う2つの小学校を見学させていただくことができた。それぞれ特色があり、各学校の校長先生及び案内してくださった先生方、また大学生との交流の中でたくさんの発見と気づきがあった。個人的には、英語を使ってコミュニケーションの中で改めて英語を使う楽しさ、異国の人々と接し、新しいことを知る喜びを再確認でき、本当に楽しかった。



まだまだ書き足りないが、以上、小学校見学を中心に学んだことを書いた。5日間の研修で台湾の教育システムについて網羅するのはかなり難しいことであるが、一教育大学の大学院生として、他国の教育事情を学ぶことは大変意義があり、貴重な経験が出来た。このような最高に充実した研修をすることが出来たのは、洞谷先生、北条先生、また国際交流チームの渡辺さん、太田さんのご尽力に尽きる。本当にありがとうございました。

台湾の教育事情 視察報告

J305313I 英語コース M1 坂口和代

今回、台湾の公立小学校と大学附属小学校を訪問することができ、台湾の進んだ教育に触れることができ、多くを学ぶことができた。

1 公立小学校訪問(新竹市立福龍小学校)

校長先生が情熱的、社交的な方で、英語も堪能なので意思疎通がしやすかった。全校生徒の太鼓演舞による歓迎を受け、感激した。音楽は言葉を超えて伝わることを改めて感じた。



福龍小学校 全校生徒による太鼓演奏

食育に力を入れている学校で、学校の農園で無農薬栽培した野菜を調理したり、販

売したりして教育に生かしている。給食の後は、教室の後ろの板の間で昼寝をする。昼休みは1時間ほど。せかせかしていなくて、学校の時間がゆっくりと流れていた。

少子化による生徒の減少が目下の課題であるが、複式学級というのではない。どんなに人数が減ろうが、2学年を一緒にすることはない。級外職員も多く、担任が病気の時に代わりに入る教員には困らない。日本では、担任が休んだ時にやむを得ず校長や教頭が入ることは珍しくない、1クラス最大40人学級と答えると、校長先生はとても驚いていた。

英語教育は、低学年は週2時間、3～6年生は3時間。南アフリカ共和国出身のALTが毎週1回来校し授業を行っている。図書館には英語の本が棚5つ分くらいある。廊下にも英語コーナーあり。小さい学校なので、1クラスの人数は10人以下と少なく、ゆったりとした雰囲気である。

2 国立清華大学附属小学校訪問

(1) 附属小学校の英語教育

美術に特化した学校で、3年生から受験を経て美術特設クラスがある。英語教育は週に2時間、英語の専科教員（台湾人）が行っている。

5年生の英語を見学した。教師はマイクを使い、スマートボードを使いこなしていた。教師の指示は7割英語、3割中国語だが、子どもたちは英語の指示をほぼ正確に理解していた。この日のテーマは、thの有声音と無声音の聞き



清華大附属小学校 5年生の英語の授業

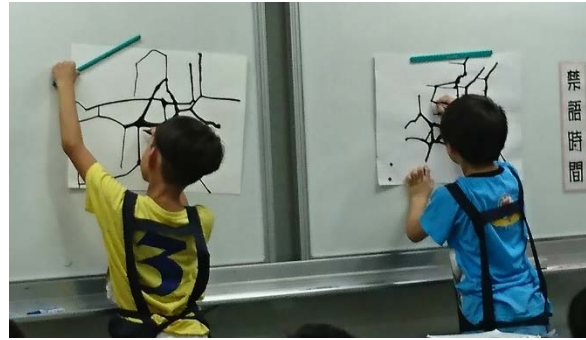
取りの練習であった。先生は舌の使い方などを説明し、子どもたち1人1人にやらせて確認。その後、デジタル教科書を用いた聞き取りクイズ、文章の中の有声音と無声音を色分けして見つける問題、先生の読み上げた単語の聞き取りとペアで丸付けなど、活動がテンポよく進んでいった。最後は、1人ずつ先生のチェックを受けて授業が終わりとなった。

教師の英語力、授業力が高く、扱っている内容も高度である。しかし子供たちはよく理解していた。1クラスの人数は25人と少なく、一人一人に目が行き届く。一人ずつスマートボードでクイズに答える、一人ずつ教師のチェックを受けるなどがしやすい。日本のように学級担任が英語教育を行うシステムだと、教師がここまでの英語力を身に付けるのはかなり難しい。英語はやはり専科の教員が指導する方が質の高い授業ができるのではと改めて思った。

(2) 附属小学校の美術教育

3年生の美術の授業を参観した。休み時間は賑やかで人懐っこく話しかけてきた子どもたちだったが、授業が始まるとたん瞑想が始まった。1分ほど目を閉じて静かにすると雰囲気が落ち着き、授業モードへと一気に切り替わった。（「マインドフルネス」の実施）

初めは前回制作した吹き流しの形から何がイメージできるかを問い、多くの子どもたちが挙手をした。先生はテンポよく聞き取りながら同じ意見の人の手を挙げさせる。友達の意見にはみんなが注目をし、うなずいたり相づちを打ったりする姿が見られた。冷やかしたり私語が全くない。自



清華大附属小 美術特設コース 3年生

分の意見を受け入れてもらえるという安心感があるため、子どもたちが活発に意見を述べていた。

代表者2名が吹き流しの線からイメージを膨らませ、前で絵を描く場面があった。私が今まで指導した際には、油性マジックでいきなり線を書くことを怖がる子が多かった。失敗したらどうしよう、消せないからどうしようと不安になるようである。友達の様子を窺ったりして描き始めるまで時間がかかる。例をたくさん見せ、まねをさせるとようやく始められる子が多い。しかし、この学級の子どもたちは迷わず線を描き始めた。自分のイメージに自信をもっているのだろう。温かい学級づくりと自己表現の繰り返し経験の賜物であると感じた。

（2）台湾での「学力観」

台湾では、最近カリキュラムが大きく変わり、「学力」とは何かという価値観が変わったそうである。「一斉に指導してテストで評価する教育は、知識一辺倒で本当の学力ではない。コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、情報処理能力など、テストでは測れないものを学力ととらえ、それらの力を伸ばせるようにカリキュラムを変えた」そうである。また、そのための評価方法も確立されており、カッティングポイントを作り評価方法も教師間で共通理解しているとのことだった。（清華大附属小のディレクターJill先生より）

清華大学附属小学校の校長先生も英語科の羅教授も学力について全く同じ話をされた。日本では、「総合的な学習の時間」が新設された平成14年前後にそのような学力観について

での議論が多くなされてきた。しかし現在の日本では、ゆとり教育後に PISA の順位が下がった反省から、再度知識学力感に戻りつつあるように感じている。毎月、每学期定期テストがあり、採点して県に報告。県平均を下回らないように指導が入る。否が応でもテスト対策に力が入るような状況である。

台湾でも「総合」という科目が週に 2 時間あった。内容は学校独自の特色ある学習活動を行う時間となっており、コンセプトは日本と同じである。どのような変遷があったのか、また実際には台湾ではどのような「総合」活動が行われているのか、機会があれば調べてみたい。

3 清華大学の大学院生との交流

清華大学で 15 年以上英語教育を指導している羅教授と話した。台湾では小学校から英語教育は専科教員が担っている。子どもの人数に応じて専科教員が 1 校当たり 1 人から 3 人ほど配置される。英語教師は人気の職業なので、現在の倍率は 100 倍以上だそうであ



清華大学の大学院生徒の交流

る。現場で即戦力となるように、大学では話す、聞く、読む、書くの 4 技能をバランスよく強化している。また、学生が実験小学校やその他の公立学校に出かけていき、授業をする機会も多い。英語科の大学院生と話したが、英語力が高く驚かされた。また、美術科の大学院生も簡単な内容であれば英語で会話できた。清華大学が国内第 2 の学力が高い学校であることもあるが、台湾の公立の英語教育のレベルの高さも要因の一つであろう。

CLIL（内容言語統合型学習）についても研究が進んでおり、いくつもの公立の小学校で実際に行っているそうである。しかし、進んでいる分、欠点も見えてきており、「CLIL は指導する教師の指導力に大きく関係するので誰でも気軽に取り入れられるわけではない」と、羅教授はおっしゃった。実際にやっているからこそ言える言葉であろう。

4 まとめ

今回の旅で、英語の必要性を改めて感じる事ができた。台湾の小学校は公立でも校長先生は博士課程を修了した方が多いそうである。公立も附属も、校長先生が国際的で英語に堪能な方だった。また、附属小学校には英語ができる先生方が多く、会話に不自由することはなかった。果たして日本ではどうか。何人の教員が英語での日常会話ができるかと問われると、「残念ながらほとんどいない」と答えるしかない。

台湾も日本と同じく英語は第一言語ではないが、もっと自由に使いこなせる人が多い。いったん英語で会話ができると、教育システムの違いや問題点、工夫している点など多くのことを聞くことができる。英語が話せるととたんに言葉の垣根がなくなり、自由に意思疎通ができるのは本当に素晴らしいことだと思う。ぜひこの喜びを一人でも多くの子どもたちに味わってもらうために、日本の英語教育はもっと進化すべきであると思った。

「友人のいる国と戦争しようとする人はいない」。昔こんな言葉をどこかで聞いて、ずっと心に残っている。言葉の垣根を超え、意思疎通できる友人が世界中にできれば、世の中から戦争はなくなるに違いないと思う。そのために、自分も尽力できればと思う。



福龍小学校の校長先生を囲んで



清華大学の羅教授と上教大の北條教授と

清華大学附属小学校での取り組み（台湾）

言語系教育実践コース（英語）

305317P M1 宗倉 祐

1. 清華大学附属小学校

今回の短期海外研修プログラムでは、主に新竹の福龍小学校と清華大学附属小学校の見学を行った。福龍小学校では授業を観察することができなかったため、今回は清華大学の附属小学校の美術・英語教育に焦点を当てることとする。

1.1 美術

本小学校では3年次から美術コースを設け、学内外から受験をし、合格した者がその美術コースに所属することになっている。日本ではあまり耳にしないシステムであるが、清華大学附属小学校がこの3年生からの美術コースを導入しているのは、美術が得意なことと学力が高いことは相関関係があるとみているからである。中でもデッサンや線画は緻密性と正確性が要求されるため、物事をありのままに捉える力が必要とされる。実際に受験の作品を見せていただいたが、そのレベルの高さは圧巻であった。今回の研修ではその美術コースに入ったばかりの（コース入り3ヶ月）子供たちの授業を観察した。授業は毎回セルフ・マインドコントロールのための瞑想から始まる。スポーツ分野でよく用いられるマインドコントロールのための瞑想はよく耳にするが、授業で目にしたのは本小学校が初めてである。その後の展開は、垂らした墨汁の跡が、何に見えるか。というものであった。生徒たちはひっきりなしに手をあげ、自分が思いついた案を次々に紹介していった。



ここで答えではなく案としたのは、正解がないということを強調するためである。「～を描いてみましょう。」ではなく、自分がその墨汁線をみて思いついたものを、線を付け足して描いてみよう、という指示であったため、子どもたちは自由な発想で様々な作品を作り上げていた。中には地図を書き込む子もいれば、鳥を書く子もいた。

1.2 英語

今回観察した英語の授業は主に”th”の発音（フォニックス）を扱うものであった。耳が音に敏感なうちに（本来であれば幼い頃から）英語の音に触れさせることが重要であるというのは周知の事実であるが、台湾の教育現場ではそれが徹底されて実行に移されているような印象であった。もちろん日本の小学校の外国語活動でもフォニックスは取り入れられているかもしれないが、少なくとも私が知る限りでは日本の英語教育では発音を徹底して学習する場はあまり設けられていないように思われる。むしろ発音よりも単語や文法の学習が先だったため、音とスペルを脳内レキシコンに結びつけることが困難であった。私も学部時代に音声学の講義で発音について学び、大学院で発音についての授業を受けることとなったが、台湾ではそれが小学生のうちに徹底して教えられているのである。”th”の発音クイズを用いることで、子どもたちも積極的に授業に参加していた。



2. まとめ

台湾では小学校の教員（英語専科）になるために、博士課程を修了していなければならない。授業の質の高さと専門性の高さに相関があるかは別として、少なくとも教師の授業の自信には繋がっているであろう。美術と英語の2つの授業を観察しただけではあるが、そのように感じた。今回の研修で感じたのは、日本と台湾の教育が全く異なっているのではなく、重要なところを徹底して教育の現場で実践に移している、という点である。多くの専門的な知識を有していることで、自信をもって子どもたちに教えてあげられるのであろう。もちろん実践力をつけることも重要である。しかし、私が今磨くことは実践力を身に付けることだけではなく、専門的な知識を身につけ、それをどのように教育の現場に還元するかを試行錯誤することである。

また、福龍小学校と清華大学附属小学校の校長先生のお話を伺ったところ、お二人とも教育に関して熱い気持ちを持つとともに、確固たる教育理念の自らのうちに秘めていることがわかった。そして、それは校舎の至る所で確認することができた。遊具や様々なところの配色、校訓など、全てが綿密に計算して設計されており、子どもたちのためであることはもちろん、環境にも配慮されていることが見てとれた。特に福龍小学校の自然農園は、一切肥料を使わずに雨水と日光、微生物による分解で栽培を行なっていることが印象的であった。

最後に、今回の研修では台湾の学校関係者の方を含め、多くの方の優しさに触れることができ、非常に記憶に残る5日間となった。今後海外から日本の教育に興味を持っている方が訪問する際には、私が彼らにその優しさを返していきたい。

新たな文化と人々との出会い

言語系教育実践コース（英語）

295316P M2 栗田 玲於

本研修に参加し、大きく分けて二つのことを学んだ。一つは台湾の教育について、もう一つは台湾の文化についてである。本レポートでは、上の2点について述べていく。

1. 台湾の教育

日本から飛行機に乗り、約3時間。蒸し暑い空気と、中華街を連想させる独特な香りが漂う中、私たちは台湾の首都（台北）へと降り立った。そこには、見覚えのあるコンビニエンスストアや、デパートが立ち並んでいた。まるで、日本のように錯覚してしまうほど、日本の文化や企業が浸透していた。しかし、その中でも教育面においては、異なる点がいくつかあった。

大きく異なる点として、子どもたちへのケアが行き届いており、親が安心して子どもを預けることができる場所になっていたことである。新竹市にある福龍小学校では子どもの欠食・孤食を防ぐため、1日3回給食が出て子どもたちの健康面を大きく支えていた。この地域は貧しい家庭が多く、子どもたちの栄養を確保する必要があったため、校長先生が国に申請し、1日3回給食が出るようになった。そうすることで、保護者も安心して学校に子どもを預けて、仕事に向かうことができる。また、自然の大切さを様々な教科で触れることで、食に対する畏敬の念だけでなく、自然に即した遊びや暮らし方を学ばせていた。新竹市だけでなく、台湾全体で子どもの数が減少している傾向にある。その要因の一つに地元を離れて、都会や外国に出て、帰ってこないということがあげられる。そこで福龍小学校では地元の良さを学ばせるために、修学旅行でわざと原住民の土地を訪れる。そうすることで、田舎の良さを再確認させている。どんなに子どもが減少しようとも、複式学級にせず、1学年に1人教師がつくように制度化されている。ここに、台湾教育の素晴らしさが垣間見える。複式学級では子どもだけでなく、教師にも大きな負担となる。1時間に2学年の内容を教えるというのは、大変困難なことである。教師の労働環境を見直すいい機会となった。

英語教育を比べると、日本の英語教育がどれほど遅れているか実感した。台湾では、1年生から週に1時間英語の授業が設けられている。そのため、英語を聞きとる力が驚くほど良い。言語教育の臨界期について様々な意見があるが、リスニング力に関しては、臨界期説はあると感じられた。教師の英語力の高さについても圧巻であった。英語専科の教師ということもあったが、発音がとても綺麗で聞き取りやすく、子どもたちにとって良い発音の手本となっていた。自らの英語力に磨きをかける良い機会となった。

2. 台湾の文化

国の数だけ、文化が存在し、その国独自の考え方が存在する。台湾にも同様に、独自の文化が存在する。

台湾は第二次大戦中、日本の植民地として日本に占領されていた。植民地として、自国の文化や教育、そして土地の形を大きく変えていった。占領され、考えを押さえ付けられるということは、とても苦痛な事と考えるが、台湾の国民はそうではなかった。インフラを整備し、教育制度を変えてくれたことで、台湾の暮らしは大きく発展すること



ができたとして、尊敬にも値するほどの感謝の思いを抱いているのだ。そのため、とても親日で治安の良い安全な国である。どこに行っても心地の良いもてなしを受け、また来たいと思わせる国と人々であった。

福龍國小での学びと日本に取り入れたいこと

芸術系教育実践コース(美術)

295464P M2 小笠原 蒔

9月17日～21日にかけて短期研修プログラムとして台湾のほうに行った。私自身、海外の経験が少なく、初めての体験を味わってきた。その中でも、2日目に行った福龍國小についてまとめたいと思う。

福龍國小は小規模小学校で、自然の中に囲まれており、静かな環境の中で学習ができる場であった。台湾の小学校は、どこもカラフルに校内や校庭が彩られており、その場にいるだけで温かみを感じた。そこで、福龍國小の子ども達が、私達の歓迎を込め、太鼓の演奏をしてくれた。衣装を身に纏い、一体感を感じさせてくれた。まさか、このようなことをしてくれると思わなかったため感動した。校内も校長先生が案内してくれ、一つひとつ細かに説明をしてくれた。それぞれに意味があり、それを全部校長先生が考え、行動している姿は日本にもあるべき姿であると思った。私自身ここまで子ども達のことを思い、考え、行動する校長先生に出会うのは初めてである。



お昼は、福龍國小の給食を食べた。給食でも、子ども達に合った薄味で出来ており、とても食べやすかった。また、この学校では朝、昼、夕と3食給食が用意されていると聞き、驚いた。こちらの親は忙しいため、それを学校側で対応しているようだ。しかし、この制度は日本の学校にも取り入れて欲しいと強く思った。最近では朝ごはんを食べてくる子ども達が年々減



少している。朝ごはんは、子ども達の集中力や脳の働きに大きく影響を与える。特に小学校の頃が一番大事な時期だろう。そのように考えると、日本の小学校にも取り入れて欲しいと強く思った。

また、図工で子ども達が制作している作品も見せてもらった。自然のものを生かして制作をしているようだ。どれも丁寧で、子ども達が好きなように作っているような作品が多くあった。日本での学校にも取り入れたら面白そうな教材が出来そうだなと思い、この空間に長い時間滞在できそうな程だった。また、校長先生も制作しており、その姿勢が子ども達から愛され、信頼されている証拠だと思った。先生とは、言葉で指示するだけではなく、まず実践をして、子ども達の前に立って同じことをする姿は大事だと学ばされた。



福龍國小では、半日のみの滞在と短い時間だったが、学んだことは多くあった。日本の学校には日本の良さがあり、台湾の学校では台湾の良さがあることが分かり、この良い部分を共有していけたら、より良い学校環境が作れるのではないかなと思った。最初は海外に行く不安があったが、実際行ってみて台湾の人達はとても優しく、英語や中国語が苦手な私の言葉を理解してくれようとする姿勢があり、来て良かったと心から思える研修だった。また同時に、また行きたいとも思った。そのために、語学の勉強をしたいという気持ちも生まれた。この研修で、海外の良さや人の優しさ、また美術の奥の深さについて学ぶことが出来た。この学びを、今後の生活や勉強に繋げていきたい。



台湾での記録 ～美術的側面から～

芸術系教育実践コース(美術)

285467P M3 田中詩穂

【訪れた文化施設】

台湾で訪れた美術に関する施設は3つある。台北市の松山文創園區と国立故宮博物院、新竹市の眷村博物館である。それぞれかつては、松山文創園區は煙草工場、故宮博物院は紫禁城という王宮、眷村博物館は軍人のための住宅といった、実用的な目的で使われていた場所だが、現代は改装を経て、地域の財産として活用されている。

2012年に総合文化施設としてオープンした松山文創園區は、商業的な目的のために作られたのではなく、台北の創造の中心(クリエイティブハブ)になることを目指し、「創造的研究所」「創造的共同体」「創造的学校」「創造的展示の

場」という4つの主要方針を打ち出している。ビル街から敷地内に入ると、南国の木々による自然が広がり、別世界にきたような感じがした。その中にあるコンクリートの無機質な工場が、アートと融合することで、建物の活用の幅が広

がり、無限の可能性を感じさせた。普段芸術に関わりの無い人でも、広い公園入るような感覚で敷地内に入ることが出来、絵画展示だけでなく、カフェやアートショップもあり、身近にアートに触れられる空間となっていた。私達が訪れた時は、いくつかの展示会が行われており、そのうちのひとつとして郊外地域の町おこしの物産展が行われ、各地



域の特色をアピールしていた。若者を中心としたアート発信の拠点として、今後もクリエイティブな活動が期待できる、活気ある雰囲気があった。

眷村博物館は国共内戦時の住宅街であるが、現在はポップな外装が施された建物となっていた。館内もトリックアートのだまし絵や写真スポットがあり、戦時下の深刻な雰囲気を重く感じさせず、気軽に歴史に触れることができるようになっていた。軍服や軍用医療機器等に加え、当時の生活を再現したような展示もあった。日本が台湾を植民地化していた時についての展示もあり、台湾に親日家が多いことの所以を知ることが出来た。

世界四大博物館のひとつである国立故宮博物院は、白を基調とした荘厳な建物で、敷地が広いこともあり、建物だけでも見応えがあった。展示だけでなく、レストランやミュージアムショップも充実しており、調度品は細工や装飾が細かく、水墨画に関しても線の数が多く、細かく描かれているものが多かった。

【小学校における美術教育】

福龍國小学校では、児童に無農薬栽培をさせていたり、台湾の国の形をした池があったり、校内が自然にあふれていた。その自然を使った工作を、積極的に行なっていた。校長先生自ら、葉を加工して使用した造形作品を制作・展示しており、先生が楽しみながら自然をアートにする姿は児童にも良い影響が与えられると思う。



また清華大学の美術学生の協力のもと、学校の教育方針を外壁に絵として描いた活動を過去に行っていた。教育方針に児童が親しみを持ち、分かりやすく伝わるだけでなく、アートを身近に感じる事が出来るのではないかと思います。書道をしている校長先生が書いた書も学校内に展示



され、教育に対する思いを日常的に目に触れ、読みとることが出来る。学校自体がテーマカラーをレインボーとしているため、学校全体がカラフルで、校長先生考案のレインボー

のハート型ベンチは、児童と教師が分け隔てなく交流ができる場として作られたそうだ。無農薬栽培をする場所は、理科を専門とする校長先生によって、光の三原色である赤・青・緑を基調とされ、緑は自然の葉の色としていた。

国立清華大学附設實驗国民小学校では、第3学年から選抜された児童のみが特別な美術教育を受けることが出来る。校内には卒業制作作品が展示され、アートに溢れていた。児童の自由な発想が、そのまま学校の景観やパブリックアートとなり、児童の活発な姿とともに、いきいきとした学校の印象を受けた。卒業児童の絵を



ファイルやノートのデザインにしたものも作っており、学校の美術に対する意識の高さがかがわれた。参観した吹き絵の授業では、黒い線のための抽象的な吹き絵から、何が連想されるか、児童が活発に発言し、主体的な活動を観ることが出来た。教師が児童の発言をもとにテンポよく授業展開し、各児童の発想をつなぎながら、様々な動物や乗り物等に見立てていった。

【清華大学生との交流】

清華大学の美術学生との交流から、台湾の現代における美術の潮流として、科技芸術があることを知った。科技芸術とは、テクノロジーとアートの融合であり、世界的に見ても顕著である。中国では昨年2017年に、「双创週(=メーカーウィークの意)CC Future Lab(=主催者の名)国際科技芸術展」が開催され、アート×テクノロジー×都市空間の融合を通じて新たな未来を切り開く試みがなされた。日本からも、最新技術をアートに応用しているTASKO、明和電機、チームラボが出展している。また清華大学の学生から、日本の職人の技術の凄さについて指摘があり、日本に対する興味が感じられた。

【さいごに】

台湾では様々な人に親切にされ、日本よりおもてなしの精神が強いのではないかと感じた。清華大学の先生や留学生だけでなく、偶



然出会った方に、駅まで一緒に歩いて道案内をしてもらい、途中で台湾のお土産もプレゼントしてくれ、有難かった。また台湾は素材を生かした健康的な食べ物が多かった。人や食べ物など、安心して研修生活を送ることが出来、また訪れたいと感じた。謝謝。

記録写真



